

# KOZMOS

図書館に想う……………	1
猪突猛読……………	2
「宇野脩平旧蔵書目録」 刊行に寄せて……………	6
コスモス60号……………	7
ご存じですか……………	8
館内だより……………	8

コスモス 1983 冬 (No. 60)

## 図書館に想う

学 長 西 忠 雄



建築学科の出身である私にとって図書館というと、建築物としての図書館に興味と関心の向

くのも自然であるが、その内容としてのソフト面の確かさはこれに優先すること。従ってその将来を見透した図書館のソフト面はこれから一層重要さもまたある意味では複雑さ、それなりに一層確りしたものが期待されると思う。私は学生の頃設計々画の課題—1 課題普通3~4週間のものがあった—で図書館なるものがあったことを遙か数年前に記憶している。その詳細はどんなものだったか失念しているが、図書館の大きな計画としては国会図書館の計画が規模の大きなことなどを閃聞して来たことが印象的である。大学の図書館となると多くの例が続々生れたわけでそれぞれに戦後のめぼしい大学のそれもよく世に問われて来ている。外見としてではなく、その図書館の機能や蔵書の持つ姿を見ればその大学の研究、教育の現況の一端が窺えるように思われ、その意味で図書館は大学の頭であり顔でもあろう。大学には書物が絶対に必要であり、そのために必要な書物を選択し、それを配慮よく購入し、その必要時に手際よく取り出せること、一方利用状況の追跡調査も

年間通じてフォローすべきこと、図書検索の汎大学的にも強化したいものである。その外閲覧室の快適さなどもほしい所であり、私の狭い経験の中でもかつて過した東大の建築学科の図書室の独特な建築学徒向けとはいえその環境—明るく快的な室内、インテリア、そして軟かいバックグラウンドミュージックさえ備えた配慮などは一つのきめの細かさであったことなどを想い起こすのである。

又、4年程前訪ねた中国北京の清華大学視察の際の蔵書190万冊とか聞かされた中央図書館の閲覧室での学生達の満室の然し静粛真摯な読書風景などを数少ないながらみた大学図書館の映像の一つに想い出す。一方また図書をめぐって嘗つて西独で耳にした個人の蔵書は原則的に持たないとの驚くべき話、これは一方図書館が極めて行き届いた社会的完備さをもつことから来る合理的な社会現象としてきたことであり驚いたことだが、私自身を入れて、日本人の本好き、積ん読に近い蔵書の重荷にうめつくされる悩みとのはざままで、改めて図書に対する観念を改めるべき姿を想い知らされる気がするのである。更にまた情報としての図書には更に一層多くのことを考えさせられると共に、生き生きと活用されない図書館では空虚な姿となり一層に堪えられないものであろうなども考える此の頃である。要するに大学の図書館を皆で大事なものと思いたいと思うこと頻りといえる。

《書評》



猪突猛読！

(順不同)

経済学部教授 菊浦重雄

『自分学のための知的生産術』 知的生産の技術研究会編 TSBブリタニカ 1982年9月20日初版 1200円

(一)

このところマスコミの話題の一つとなっているのは「生涯教育」とか「生涯学習時代」などとライフワークが取沙汰されている。つまり人間の生きがい論であったり、生きがいをどこに求めるかということのようである。「自分学」という言葉もどうやらそういう点から出たもののように思われる。筆者がこの1ヶ月内外に手にしたこの種の本をあげるとNHKアナウンサーの鈴木健二著「自分学のすすめ」(ダイヤモンド社57年9月17日初版、57年11月16日、すでに39版を重ねている)、また御茶の水女子大教授の太田次郎著『自分の時代の自分の見つけ方』(PHP研究所、57年12月6日1刷)、朝日新聞外報部の猪狩章著「自分史のつくり方」(情報センター57年12月11日、1刷)などと「自分学」に関する出版物が続々と出されている。

一体「自分学」とはどういう意味をもち、著者達に理解されているのか、まず鈴木氏の「自分学」は次の4つである。①自分学は自分自身を叩き台とする実証学である。②自分学の基本の一つは、自分自身に興味を持つことである。一種のきわめて高等なナルシズムである。③自分学は、自分をつきつめて考えることによって、自分を新しい自分にして人生に勝つ方法を学びとろうとするものである。④自分学の重要なカギは、自分が危機に陥った時に、どうにかして自分自身の中からなんらかの解決手段を発見していくことにある。猪狩氏の紹介では「自分の像を自分で見つめつけるといふこと、いかなるときでも『自分』の姿

勢を問い直し、周りへの配慮をなす」ことが自分をもつことであるという。

ここで紹介する一冊も表題のごとく「自分学」であり、しかも「自分学」のための知的生産術である。本書のそして研究会の「自分学」とは組織や機関のそとにおいて自分の学問、自分の知的水準をたかめるための学問研究、知的レベルを高めることである。「私は自分で学び自分で卒業する『学び』のことを『自分学』とよび、自分学を究め自己開発をし、能力を身につける」ことこそ自分学そのものであるというのである。

(二)

本書の全体像と内容にふれよう。この本は「知的生産の技術」研究会のメンバーの4人の人々のノウハウをまとめたものである。知的生産の研究会名は京大人文科学研究所教授梅棹忠夫著「知的生産の技術」(1969年・岩波新書、青版722)を源流とし、教授はこの会の顧問の地位にある。これまで12年間にわたって知的生産に関する勉強会を企画し実行し、さらに外部から招いた講師の講義・討論・発言の内容をそれぞれのスタッフが自分なりに理解し、自分のものにした経験を一冊の本にしたものである。内容は多岐多様と広範なものであって、I~VIと6章にわけられ、Iでは自分学への出発、IIでは知的生産のための4つの原則、IIIは知的生産のための4つの行動、IVは知的生産者の効率追求ノウハウ、Vは知的生産のためのハードウェアとソフトウェア、結章のVIはプロに聞く知的生産術として、紀田順一郎、植田康夫、田原総一郎、栗本慎一郎、河原淳、堀江謙一氏などの報告をまとめたものである。

(三)

知的生産のための4つの原則、4つの行動(読む・考える・調べる・書く)、さらに知的生産のためには時間管理をどうするか、人脈とその情報管理、ノートをはじめカードの整理から情報機器

類をどのように活用するかということに具体的・体験的にふれられている。行動のうちの調べる(100頁—121頁)項目では文献の検索法と取材法、とくに図書館の利用法についてふれられている。研究者などにとってごく日常的でそれほど気にかけない点を注意深くほりさげていることなど、私などのように資料収集・データ整理をする者にとって大変効性をもつものである。加えて再度、梅棹忠夫著「知的生産の技術」を、そして筑波大教授川喜田二郎著「発想法(正・続)」(中央公論社)を読む必要を感じさせたのも、この本の価値であろう。

また、本書の巻末には全国図書館一覧があげられ、とくに付録2では昭和57年7月現在の日本語ワードプロセッサ比較表としてそれぞれメーカーと機種、その機種の特徴などがあげられている。

大学院博士課程 中 里 巧

『沈黙の世界』 マックス・ピカート著 佐理利勝訳 みすず書房 1981年 26刷

今また読み返してみても、私は絶句する。書評が課題であるのに、そのように言うことによってしか、切り出すことができない。書評という課題を与えられたときはじめ、私の研究テーマであるキルケゴールに関するいくつかの文献が、頭に浮んだ。しかしそれらの文献の背後からしだいに、私の心奥に働く導師でもあるかのようにして、立ち現われてきたのが、この本なのであった。この本はいわば、思索するというか或いは言葉することそのものの根源へと、読者である私を立ち返らせてくれた本、である。この本を読むことによって私は、確かに変わった。たんなる知識の集積から、それら知識を産み出してきた聖なる源へと、私の心が向きを変えたということ、実感したからだ。この本は、すでに出来上がった知識の体系を、読者に伝えるものではない。しかし、言葉にできない何か光輝くものを前方に見つめて、読者に向けてそれをただ指さしているだけでもない。この本はむしろ、読者ひとりひとりが、その光輝くものが何であるかをみずから言葉にし

て言うことができるように、読者ひとりひとりの心に働きかけて、読者ひとりひとりが言葉の源へと立ち返るようにさせるのである。この本は、そのようにしてわれわれの言葉を、現代の騒音と化して死にたえた言葉のがれきから、再生させようと試みる。ところで一体、言葉の源とはどこにあるのだろうか。ピカートは言う、「言葉は沈黙から、沈黙の充溢から生じた」(17頁)と。そして続けて、「言葉に先だつ沈黙は、精神がそこで創造的にはたらいっていることの徴証なのだ……」(同頁)と。言葉の源は沈黙にあるということだ。しかし、この主張以上に重要なのは、「言葉は沈黙以上のものである。それも、言葉のなかには真理が姿をあらわすからに他ならない」(27頁)という、言葉に対する根本理解だ。「沈黙はつねに、そのうえにより高度のものが現われ出するための単なる土台なのである」(24頁)。しかしそのように高度なものである言葉が、「沈黙との連関をうしなえば萎縮してしまう」(8頁)のである。しかるに、「現代世界の言葉は……沈黙から生れ出るのではない。そうではなくて、何か一つの他の言葉から、いや、他の言葉の騒音から生れるのである。したがってまた、言葉は決してふたたび沈黙のなかへと帰ることはない」(201頁)。このようにしてピカートは、騒音と化した現代の言葉が、人間に沈黙と本来の言葉とを忘れるように仕組んでいるとして、現代の言葉を断罪する。そしてピカートは騒音と化した現代の言葉を「騒音語」と規定して、これと闘いつつ、言葉を再生させるために、われわれひとりひとりを沈黙へと立ち返らせようと努めてやまない。例えば、「ラジオ」という身につまされる章がある。「語らせておきながら、それを全然言葉として受け取らないこと、……それは言葉に対する最大の侮辱である。ラジオは、もはや言葉に耳を傾けないように人間を教育するのである。だが、言葉に耳を傾けないということは、とりもなおさず人間にもはや耳をかさないことである。そしてこのことは、人間を『相手の人』(Du) から—『相手の人』に心に向けることから—強引に連れ去ることを意味している」(245頁)。

直接ドイツ語のテキストをゆっくり読んでいく

ことができるなら、それが一番よいとおもいます。

Max Picart: “Die Welt des Schweigens”,  
1977, 4. Auflage, Eugen Rentsch Verlag.

白山本館 山内 四郎

『長澤規矩也著作集』 全8巻 汲古書院刊

漢籍を中心として、和漢古書に及び空前の業績を残しなした書誌学者長沢規矩也博士は、昭和55年11月21日享年78歳をもって逝去した。それに先立ち53年7月、日比谷の山水楼において、博士の喜寿祝賀会が開かれている。その席上参集者一同より2種の書籍刊行の希望がでてゐる。それが「図書学辞典」(三省堂、昭和54年1月刊。020.33: NK)であり、本著作集であったという。博士の歿後「長沢規矩也先生喜寿記念会」によってその編集がなされ、この度第1巻の刊行(昭和57年8月)を見た。

その構成は、「安井先生頌寿記念書誌学論考」(松雲堂、関書院、昭和12年12月刊。020.4: NK)を中心にして、大正15年より、昭和49年までに、「斯文」「支那学研究」「書誌学」「書物趣味」「書苑」「宇野哲人先生白寿記念東洋学論集」などに発表した19篇を加えたものである。なお、「安井先生頌寿……」に掲載している「長沢規矩也編著目録(-)」は、第8巻に収録予定のため省略している。

著者は、支那文学、支那哲学の専門の先生よりも、東洋史の白鳥庫吉博士の研究方法来に影響をうけたと言われているが、本書、特に「安井先生頌寿……」に収める諸論考は、後年刊行し、学位論文にもなった「和漢書の印刷とその歴史」(吉川弘文館、昭和27年9月刊。022.3: NK。増訂版昭和31年4月刊。022.3: NK: 2。本著作集第2巻収録)などのように、事実をあまり掘り下げず通史のように書きつらねると言ったものではない。それは、関係文献を博搜するのは勿論のこと、広範囲に実物を比較検討し、皇帝避諱(その王朝の皇帝の諱一本名一を別字に変えたり、その一部の末画を欠くなどして文字其儘を使用するこ

とを避けること)の信頼性に及び、刻工名を搜集して一定の類型を行うなど、その資料蒐集は詳細を極め、これを駆使して、精緻な論証を行うという、科学的、考証学的な研究と行うことができる。ただ、事実の羅列を行うだけでは、知識を得ることができても、その論証経過が明確でないと人を説得するものがない。本書は、その要求に十分応え得るものと言うことができる。また、旧版と対照すると、単に旧稿を転載したものではなく、その後の研究の成果が随所に見受けられる。その上編者による補記もある。さすがは、学的良心の著述であるということができよう。

また、本著作集は学術論文が中心であり、「図書学参考図録」(汲古書院、昭和48—52年刊。020: NK: 3)「図解書誌学入門」(汲古書院、昭和51年刊。020.1: NK)「図解和漢印刷史」(汲古書院、昭和51年刊、749.222: NK)などの図録類、他に辞書目録法、分類法の類は含まれていない。

第2巻は、和漢書の印刷とその歴史(昭和57年11月刊)以下次のようなものが予定されている。第3巻 宋元版の研究。第4巻 蔵書書目・書誌学史。第5巻 シナ戯曲小説の研究。第6巻 書誌随想、第7巻 漢籍解題、第8巻 地誌研究・漢文教育。

白山本館 小島 浩

『勝海舟全集』 勁草書房

勝海舟と井上円了

勁草書房版「勝海舟全集」(昭和47—57年)は、従来定本とされて来た改造社版「海舟全集」(昭和2—4年)に比べ、「海舟宛書簡」(全集別巻I)を始め、多くの資料が増補改訂され、新たな資料が収録されている。中でも「海舟日記」(全集18—21巻)は、改造社版の「海舟日記」(抄)であったものから、勝家に保存されて来た自筆本25冊の「海舟日記」(文久2年—明治31年)を収め、海舟研究はもとより、幕末から明治にわたる貴重な第一級の史料となっている。

海舟と円了の関係については、すでに「井上円

了先生」(大正8年),最近では「東洋大学校友会報」(102号,昭和52年3月)でも取りあげられ紹介されている。これらのことは、勁草書房版「勝海舟全集」の日記や書簡を通して、円了と海舟の関係をうかがい知る事が出来る。「海舟日記」には、井上円了の名が、明治22年9月4日から明治24年9月19日にかけて、13ヶ所見出すことが出来るし、「海舟宛書簡集」には円了から海舟宛の2通の書簡が収められている。明治22年,時代は欧化・改良の時代から反省期に入っている。海舟の念願していた国内統一も実現し,2月には憲法が公布されている。明治維新という政治の激動期を生きて来た海舟にとって,感慨深い年であったはずである。赤坂氷川町にあった海舟邸には「大ていの人、是非、一度ぐらい、氷川を尋ねる。変り者、途方にくれた者……政党员、新聞屋、書生、軍人……寄附金を乞うもの……出入りするものが三千人に超えた」(全集11巻,海舟座談,p.15)政治家、ジャーナリストはもとより、あらゆる階層の人達が海舟邸を訪れている。この中には、同志社大学設立に情熱を燃すキリスト者新島襄の姿もあった。まさに、この時代の教祖的存在である。この時期円了にあっては哲学館の草創期であり、明治22年11月、文京区蓬来町に新校舎を建て、授業を開始した。円了は学問の理想を実現すべく、哲学館経営に東奔西走していた時期である。「海舟日記」には「井上円了,哲学院〔館〕へ百円寄附」(明治22年9月27日)「井上円了,山県の事に付き内話」(同10月3日)「円了方へ一封認め遣わす」(同11月7日)「井上円了,13日,哲学館開業の旨,古仏像,金子十五円寄附」「井上円了,種々談」(同11月21日)等々、海舟が円了の理解者であり、支援者であることをこれらの日記は良く示している。明治22年勝海舟67歳,井上円了32歳である。海舟と円了、「種々談」二人は何を語ったのであろうか。この年6月欧米から帰国したばかりの円了は、見聞した事、日本の学問をうちたてる必要のある事、哲学館の教育や理想を海舟に訴えたにちがいない。翌明治23年,円了は海舟に書簡を送っている。「啓者先般御願ひ申上げ候、宮内省御下賜金の儀は、目下むづかしき趣き拝承仕上り候。然るに哲学館も現今の処、維持

法相立ち申さず候に付き……宮内省へ御願ひ込み成し下され度く希望奉り候……。」(7月21日付)宮内省の恩賜金が受けられるよう取り計って欲しい旨の書状である。そして他の書状では「過日米信州各地巡回仕り候処、各地にて御揮毫切望致す者これある為めに、百余円寄附金も相集り誠に以て有難き仕合せに御座候。先日出発の際、御揮毫二、三十枚持参仕り候えども、大抵有志に配付仕り候間、過日御願ひ申上げ置候縄地の御揮毫出来仕り候わば、使いの者に御渡し下され度く願ひ上げ奉り候。……」(明治24年3月31日付)と書状を送り、各地巡講を前にして哲学館経営の資金を得るために、海舟に揮毫をたのんでいる。海舟の揮毫については「早くて、しかも話をしながら、チョイチョイと書かれるのであるが、書かれる時は気の満ちた時ばかりであったらしい」(全集11巻,p.18,巖本善治,「氷川のおとずれ」)

明治24年,円了は海舟の書を携えて日本各地に巡講の旅を続けることになる。

工学部分館 中村 準 一

『第三の波』 アルビン・トフラー 日本放送出版協会

人類の未来は?

『第三の波』は今では新刊書とは言えないが、未来の文明を画いた試みとして各方面で著しい反響を呼んでいることは周知の事実である。トフラーは人間の文明を三つの段階に分け、第一の波(農業革命)、第二の波(工業革命)、第三の波(コンピュータ革命)と呼んだ。現代はこの第二の波の終末、そして第三の波がまさに始まろうとしている時代である。彼は未来の社会を大胆に画いている。

彼は言う、未来はコンピュータの時代であり、今人間が行っている労働や単純作業はすべて、コンピュータによって命令されたロボットが行うようになる。もはや工場には人間の姿は見られな。人間は頭脳的な仕事に没頭する。

社会は根本的に変化する。工場生産を基盤とした現代社会は、規格化されており、人間は生産の

ための手段と見なされている。人間は労働力であり、手段である。しかし未来の社会では、人間は生産から解放されて自由を得る。人間は自己の目的を追究することを保証され、個性のある多様な生活を営むことができる。

トフラーは細かなデータを駆使し、多くの専門家の意見を引用し、社会を分析しながら、強引に自説を主張していく。それは行動主義に根ざしたアメリカの楽観的世界観の主張である。

もし未来がトフラーの画いたような社会になるとしたら、とてもすばらしいことだろう。だがこれには一つの条件が必要だと思う。その条件は誰でもが知っており、肯定するものなのだが、現代世界を見る限り、必ずしも易しいものではない。つまりそれは、「もし人類が滅亡しなければ」という条件である。現代は人類の生存が最も危険にさらされている時代なのである。

この点で警鐘を打ち鳴らしたのはジョナサン・シェルの地球の運命(朝日新聞社発行)である。

彼は言う、現代世界の核兵器保有量は広島に投下された原子爆弾の1,600,000個分であり、もし核戦争が起ったら、ほとんどの人間が死ぬであろう。たとえ核兵器によって直接殺されなかった人々でも、放射能による障害で徐々に死んでいく。そして地球の生態系が破壊されてしまうので、多

くの動植物が死に絶えるであろう。やがて大気中の炭素が失われ、地球は死滅していく。

シェルも多くの専門家の言葉を引用しながら説得していく。人々は核兵器を廃絶するための何らかの行動を起そうとはしない。人間はもはや共通の連帯意識を失ってしまったのではないだろうか。現代人は未来を望まないかのように、衝動的に行動しはじめている。政治的にも社会的にも、絶望的な風潮がはびこって来た。

だが他方、核の危機は今まで眠っていた人類の意識を呼び覚ましたことも事実である。古い考え方に対して、全く新しい考え方が出て来た。例えば、軍事力を優位に保つことによって国家の安全を達成しようとする考えは古い考えであるが、それに対して、一切の核兵器を無くすことが、軍事的見地から言っても安全であるという、今までは全く見られなかった新しい考えも出て来たのである。現代、我々は生きのびようとするならば、この新しい考えを選ばなければならない。

以上の二冊はそれぞれ全く別の本であるが、我々に一つの事を教えている、と私は思う。人間の未来はトフラーの言うような社会なのだろうか。それとも滅亡なのだろうか。二冊とも、我々がかつてなかったほどの歴史的転換期に生きていることを教えている。

## 「宇野脩平旧蔵書目録」刊行に寄せて

編集委員代表 島田昌幸

本学御出身の故宇野脩平先生の旧蔵書で当館に収蔵された約1,200冊(一部洋書を含む)の整理、そしてまた、それらの冊子目録の作成が待たれていましたが、昭和57年12月、「宇野脩平旧蔵書目録」と題して刊行の運びとなりました。

宇野先生の蔵書は先生が亡くなられた翌年の昭和45年2月に御遺族の好意により当館に託されることになったもので、先生の御専門であった日本近世史を中心として幅広く収集されています。

特に、漁業、交通史関係の史料は先生が自ら各地を足で歩いて調査・収集されるという御苦心の末に得られたものだけに、学術的に高い価値を有するものです。

その意味で、この目録の完成は遅きながら、研究者にとってあらたな福音となるものと言えましょう。

先生は昭和11年本学文学部予科2年に編入学、翌12年4月、国文学科に入学され、同学科を御卒業の後、財団法人竜門社の渋沢栄一伝記資料編纂所の編纂員となられ、研究者としてのスタートを切られました。昭和17年4月には日本常民文化研究所研究員を兼務されるようになり、同24年2月、日本常民文化研究所設立委員となられ、後には常任理事に就任されています。昭和32年1月、東京女子大学文学部助教授、同10月、本学校友会常任評議員、昭和37年4月、東京女子大学教授。

# ΚΟΣΜΟΣ 60号!

## コスモス・宇宙・図書館

文字でなく、絵で書かれた「宇宙人への手紙」で世界的に有名な、カール・セーガン博士 (Carl Sagan : 1934. 11. 9~ ニューヨーク市ブルックリン) は、その著書、コスモス (宇宙) のなかで、世界最古の図書館について語っています。古代アレキサンドリアの伝説的な図書館の建物のうち、今日、なお、その姿をとどめている最大のもの、それは、「セラピウム」と呼ばれるじめじめした地下室。此処は、世界史上初めての、真実の研究室でした。学者達は此処で、コスモス (宇宙) の全てについて学んだのです。宇宙を意味する「コスモス」と言うギリシヤ語は、宇宙の秩序を意味し、それは、混乱を意味する「カオス」に対する言葉でした。「コスモス」と言う言葉には、宇宙の複雑且つ微妙な一体性に対する、恐れと、尊敬の念がこめられています。そこは、哲学、文学、数学、物理学、医学、生物学、天文学、地理学、工学等々を研究する学者達の世界だったのです。天才が花開きました。このアレキサンドリアの図書館は、世界中の知識を人々が初めて真剣に集めた場所でもあったのです。

図書館の中心部には、膨大な蔵書がありました。図書館の人達は、世界中のあらゆる文化、あらゆる言語に関する本を探して歩き、遠く海外までも人々を派遣して書物を買集めました。アレキサンドリアの港に船が入ってくると、船内をくまなく搜索しましたが、それは、密輸品をさがすためではなく、本をさがすためだったのです。古代文明が崩壊してしまった今、これらの本は、一体どうなったのでしょうか。

この「コスモス」と言うコトバを誌名に持つ本誌も、ここに、60号を迎えるまでになりました。創刊時の、発行動機は、教職員・学生と図書館との三者相互のコミュニケーションを計り、単なるPR誌としてではなく、利用者と図書館との、相互理解の場となればと言うことだったのです。

## 図書館 河村道也

爾来、今日まで、発足時の目標に向って、ステップ・バイ・ステップと号を重ね、その過程で、コスモスを媒体としながら、当初の目的を達成させ、浸透させるための努力を続けてきました。

現在、多くの利用者が、図書館を利用し、多方面にわたる資料を使って研究に、勉学に、その他に打ち込んでいます。然し、他方に、ほとんど、或いは、全く、図書館を利用しない人々がいると言うことも否めません。図書館としては、如何にしたら、それらの人々にも、より図書館を利用して貰えるか腰をすえて、取り組んで行く時かも知れません。コスモスも60号を迎えたこの機に、これらの問題と取り組んで見てはと思います。

本誌コスモスが、一人でも多くの利用者に、図書館への興味をかりたて、その足を図書館の方へ向けることが出き、そのかけ橋になるならば、それは、そのまま、創刊時の願望へ結びつくことになると思うのです。それには、先ず、興味深く、楽しく、親しみ易いものでありたいと思うのです。こう申しますと、苟しくも、大学図書館の機関紙たるものが、その様なのお叱りを受けるかも知れませんが、面白く、興味深いと言うことは、決して、レベルが低いと言うことと異語同義ではないと思いますし、楽しいと言うことがアカデミックでないとも言えません。高度の内容のものがあれば、解り易く、地味な内容は、楽しく、同じパターンのもは、バラエティーに富んだものに、全体にわたって興味深く、企画し、編集して行くことではないでしょうか。とは言っても、ただ、平易で、親しみ易いだけで良しとは、決して思っておりません。出来得れば、アフォリステイックな、警句に富んだ内容が見られればと思います。何も、最後の一語で、全てを、逆転させるような効果的な逆説をあやつった、かの、ロシュフーコー (La Rochefoucauld : 「箴言」<sup>しんげん</sup>によって知られる、17世紀の仏のモラリスト) の様には申しませんが、加之、諷刺的な、アイロニカ

ルな味が、少々、垣間見られれば幸いです。もう一つ欲を言えば、ウィットが散見出来れば、これ又幸いと思うのですが、ともあれ、言うは易し、行ふは難し。一朝一夕には短兵急には出来るものでもありません。ローマ一日にして成らずです。この様なニュアンスを、今後共、コスモスに少しでも反映出来れば幸甚です。もし、仮りに、現在の図書館に、画竜点睛を欠くものありとすれば、過言かも知れませんが、晴（ひとみ）は、利用者へのサービスと言うことになるかも知れません。

これら諸々のことが、今後の、コスモスの発展への一助にでもなればと思います。



## ご存じですか

### 新聞の語源

新聞という言葉はわが国で生れたものでなく、ふるくから中国でもちいられている。すでに唐の時代に地方で起った出来事を随筆体の読みものにした南楚新聞(082.1:S—8:1—32)というのがあるのを始めとし、ついで南宋時代末に趙昇の編集した朝野類要の中にも新聞の文字を記している。日本では文化四年版の「西洋方代暦」の中に新聞という名称のあるのを初見とする。しかし新聞の社会的な存在価値を認識したのは正徳五年に「西洋事情」を著した新井白石とするが、新聞を実際に眼にした日本人では万延元年正月にアメリカに赴いた新見正興らをもって最初とする。

### 流石の語源

中国六朝時代晋の国に孫楚というひとがあった。その性根が豪快で才智拔群であったが、おしことには人に対し驕りたかぶる癖があったので、あまり評判はよくなかった。のち立身して地

### 訂正

前号の記事を次のとおり訂正いたします。

P.3 右上3行目 底く一底く

P.4 左下3行目 れのような→そのような

方の大守となったが、そのまだ若かったころ、世を見かぎって隠棲しようとおもい、王齋というひとにむかい「まさに石に枕し流れに漱<sup>くもそ</sup>がんと欲す」というべきところを誤って「石に漱ぎ流に枕せん」と話した。そこで王齋が「流は枕すべきものでなく、石は漱ぐべきものではない」と詰った。すると孫楚は「流に枕するのは耳を洗うためであり、石に漱ぐのは歯を磨くためである」と答えて巧みにこじつけてしまった。これより「さすが」という言葉に流石という字をあてるようになったというのである。

(「ものしり事典」河出書房より031.4:HS)

### 館内だより ('82.10/14~12/7)

- 10月14~16日 全国図書館大会 於福井市, 大川館長, 鹿島, 日野, 丸山, 岩田参加
- 19日 朝霞分館視聴覚アワー
- 26日 朝霞分館視聴覚アワー
- 29日 視聴覚室主催映写会「オール・ザット・ジャズ」
- 29~11月3日 私立大学図書館協会東地区研究部会 於東北学院同窓会館, 山内(四), 矢野, 小笠原参加
- 11月9~12日 文部省主催大学図書館職員講習会 於東大図書館, 高橋参加
- 12日 視聴覚室主催映写会「ベニスに死す」
- 16日 九州大学図書館員成田貴美枝氏研修のため来館
- 19~20日 第3回書誌作成セミナー 於江東区文化センター, 山内(裕)参加
- 27日 父兄会千葉県支部見学のため来館
- 12月1日 附属姫路高校生見学のため来館
- 4日 附属牛久高校P.T.A.見学のため来館
- 7日 朝霞分館視聴覚アワー

### — 編集後記 —

コスモス60号! これまでの皆様方のご支援に感謝いたします。今後の発展に向けて、なお、一層のご協力をお願いいたします。

ご執筆者には、ご多忙中にもかかわらず、原稿をお寄せいただきまして、有難うございました。